

常照

57
2008

佛教大学図書館報

目次

私の「お宝本」顛末記……………	山崎高哉	1
・「知恩院阿弥陀堂建立(再建)―写真集―」 「知恩院継志学寮」について……………		
浄土宗文献室所蔵未整理資料から……………	三輪晴雄	6
・「佛教大学図書館ポータルサイト」の将来像 飯野勝則……………		
平成19年度図書館関連委員会委員名簿……………		
		22
		12
		6

「智恩院門前」

色刷木版画『都名所百景』の一。浄土宗総本山知恩院は法然上人の教えを設立の理念とする本学にとっても本山である。枝垂桜と松の向こうに見える姿は、現在する三門に比べて随分優しい形をしている。この図の絵師は北水、版元の石和は江戸時代後期から明治期にかけて瓦版錦繪や『浪花百景』なども刊行している。



●佛教大学図書館所蔵

私の「お宝本」顛末記

図書館長

山崎高哉



今日、大学の個性化、特色化が叫ばれ、それに伴い、附属図書館も個性化、特色化を求めて、様々な努力を重ねている。我が図書館も例外ではなく、「お宝」をデジタル化し、公開したり、各種メディアからの掲載要請に応じたりしている。この傾向は、今後も、いっそう強まるであろう。

この「お宝」発見ブームに、さて私はどんな「お宝」をもっているのだろうかと思いをめぐらすと、私が研究対象にしている20世紀初頭ドイツの教育改革者であり、教育学者であるケルシェンシュタイナー (Georg Kerschensteiner, 1854-1932) が1905年に出版した“Die Entwicklung der zeichnerischen Begabung. Neue Ergebnisse auf Grund neuer Untersuchungen.” (『描画能力の発達—新しい研究に基づく新しい結果』) という508ページの大版 (縦28cm) の著作 (写真1, 2参照) を私の「お宝本」として大切にしてきたことに気づく。この本は、たしか30年ほど前、日本中の主だった図書館を探し歩いても見つからず、その後、懇意にしていた洋書の古書店主に頼み、やっつこのことでドイツで見つけてもらい、奮発して購入したものである。ケルシェンシュタイナーの著作は数多くあるが、彼の主著“*Theorie der Bildung*” (『陶冶論』、1926) 以外に、こ

れほどの大著はなく、そのうえ児童画800枚の白黒刷りと47枚の色刷りを収載しているだけに貴重な書物である (写真3-8参照)。彼はミュンヘンの視学官として精力的に取り組んだ各種教育改革の一環として、当時の図画教授法—それは抽象的な幾何学的図形や模様を主たる教材とし、教師が黒板に描いた手本通りに、子どもが「きちんと、正確に、きれいに」描くというものであった—を改革するために、6歳から14歳までの子どもの絵を約50万枚収集し、これを厳密な数学的、統計的手続きを踏んで整理・分類し、子どもの描画能力の発達段階を明らかにしたのである。この研究は今日なお、子どもの描画能力の発達に関する最も重要な資料収集の一つと評価されているし、それに基づいて改革された図画教授は1908年、彼の名を一躍世界的なものにする「書物学校」から「労作学校」への改革の不可欠の手段として位置づけられているので、彼の教育改革の解明のためには、本書は、どうしても手に入れたい書物であった。

かつて私は、ケルシェンシュタイナーの日本への影響を調べるため、国立国会図書館、大阪府立図書館、京都大学附属図書館、京都府立資料館、天理大学附属図書館、東京教育大学附属図書館、富山大学附属図書館、奈良女子大学附

属図書館、広島大学附属図書館等を訪ね、各館所蔵の図書・雑誌類の調査を行ったことがある。そのとき彼の“Die Entwicklung der zeichnerischen Begabung. Neue Ergebnisse auf Grund neuer Untersuchungen.”は、上記の図書館には所蔵されておらず、私としてはかなり徹底して調べたつもりであったので、この本を所有して以来、「日本では私しかもっていないのではないかと秘かに私の「お宝本」にしてきたのである。

当時は、国立国会図書館総合目録が唯一の総合目録で、図書館間相互貸借や文献複写も今日ほど進んでいなかった。したがって、図書館に直接足を運んで調べる方が早く、国立国会図書館へは何度往復したことか。1回5冊の閲覧申請を1日に何回となく繰り返し、ケルシェンシュタイナーの教育思想と実践を紹介した単行本及び雑誌・学会誌・研究紀要等に掲載された論文・記事をコピーした。また、当時の大学図書館では、全部が全部、学内の蔵書を一元的に管理しているとは限らず、「〇〇先生の研究室にありますので…」と言って断られたこともあった。

今回、“Die Entwicklung der zeichnerischen Begabung. Neue Ergebnisse auf Grund neuer Untersuchungen.”を私の「お宝

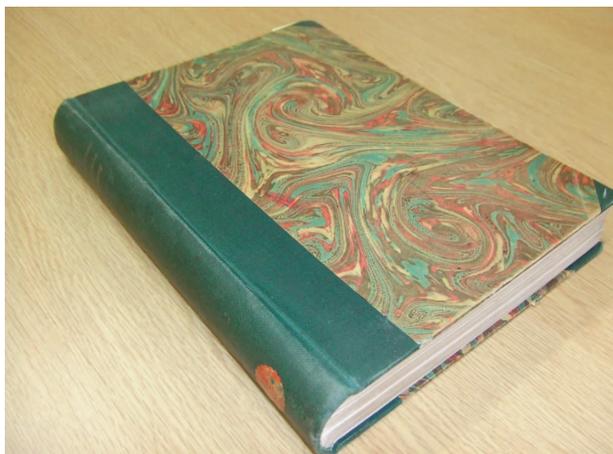
本」として紹介するために、念のため、本学図書館専門員の竹村心さんに、これを所蔵している図書館があるかどうかを、調べてもらったところ、意外や意外、三つの大学附属図書館に所蔵されていたことが分かったのである。しかも、そのなかに、ほぼ30年前に調べさせていただいた二つの大学が含まれていた。こうして、私の「お宝本」の価値は一挙に下落した。私の落胆ぶりは、ご想像にお任せしよう。

しかし、いい格好をつけて言うのではなく、本心、図書館長を務めさせていただいているおかげで、国立情報学研究所が提供している目録所在情報システム（NACSIS-CAT/ILL）のすごさを実感させてもらった驚きと有難さの方が私には大きかった。NACSIS-Webcatで総合目録データベースが瞬時に検索され、たちどころに文献の所在が分かるのには、かつて文献探しに苦勞をした身にとっては隔世の感を覚える。今後、これまでに編纂したケルシェンシュタイナー関係文献目録に、この「文明の利器」を活用して増補を行ってほしいという新たな意欲が湧き上がってきている昨今である。

(教育学部教授・やまざき たかや)

Georg Kerschensteiner (1854—1932)

Die Entwicklung der zeichnerischen Begabung. Neue Ergebnisse auf Grund neuer Untersuchungen.



マーブルリングの美しい表紙

日本のマーブルリングである“墨流し”に比べて色数が多く華やか。

タイトルページ

円形の周囲に“ZENTRALINSTITUT FUER ERZIEHUNG UND UNTERRICHT”とめぐらされた紫色蔵書印記が残る。

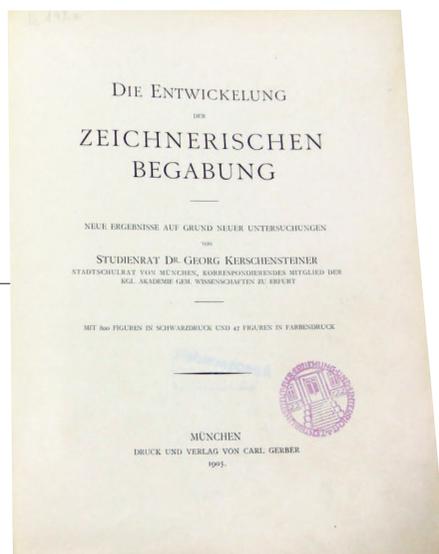


表.1 39頁



ケルシェンシュタイナーは、子どもの描画能力の発達を4段階に区別したが、その最も初期の段階「図式の段階」の児童画。

表.3 43頁

知能の発達に遅れが見られる児童生徒の描画。彼らの「まとまりのない」描画を収集・記録したのはケルシェンシュタイナーが初めて。

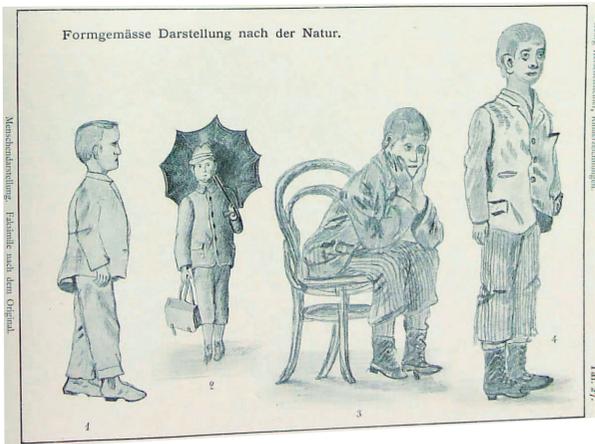
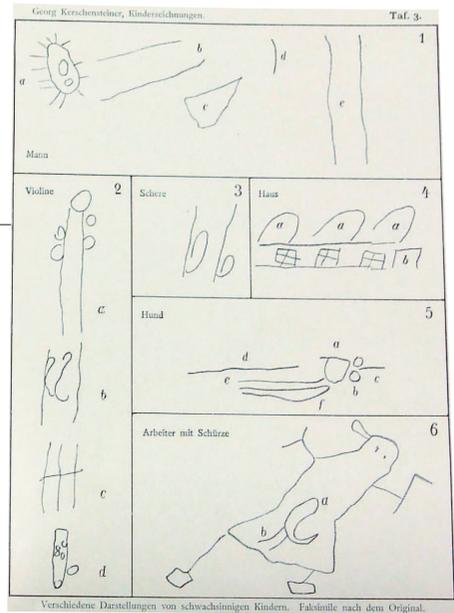


表.27 93頁

子どもの描画能力の発達の最後の第4段階「形態になかった描写の段階」。

表.91 295頁

同じく第4段階の彩色画。対象を忠実に描写するのを図画教授の究極目標とするケルシェンシュタイナーの伝統的な絵画観の表れと批判されている。



表.139 435頁

イースターエッグのオーナメント。平面図。
手書き模様で彩色される。
第7及び第8学年（日本で言えば、中学2、3年）
の女子の作品。

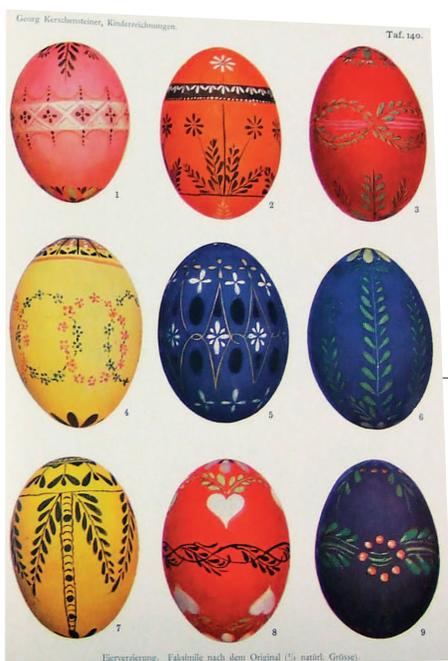


表.140 436頁

同上側面図。

「知恩院阿弥陀堂建立(再建)一写真集一」・「知恩院継志学寮」について

浄土宗文献室所蔵未整理資料から

三輪 晴雄

一、はじめに

昨年(平成19年)10月から書庫内の整理を進めている。開設以来(昭和44年4月)、収集資料は増大、また施設の拡充・移動、今は図書館の付設施設に位置づけられるなど、転変を重ねてきた。この状況の中で浄土宗文献室の新たな展望が考えられており、これに応ずるための作業である。

作業を進めるなかで納受経緯が不明で未整理の資料が散見される。多量ではないが、なんとなく気になる資料群である。十分な説明にならないが2件の資料を紹介し責を果たしたい。

二、「知恩院阿弥陀堂建立(再建)一写真集一」

セピア色に変色し、湿気を含んだ形跡があり朽ち果ててカサブタが剥がれてゆくような写真61葉が収められた袋と、これを編集した解説4頁、複写写真28頁構成のA4版冊子が書類袋に納められていた。

冊子の編集者は「浅野良光財務部長記す」とあり、当時宗会議員でもあった浅野師により編集されたのである。再建の解説は『知恩院史』を引用し2頁でまとめられている。3頁から編者がこの冊子を編集した経緯と写真解説と十カ条の箇条書きが記されている。その箇条書きは

- 一、この阿弥陀堂建設写真集は、昭和六十一年五月、倉庫中より発見された三十数枚の写真をもとに編集したものである。

- 一、この写真は、明治三十八年十二月十日と三十九年三月二日に、京都の写真屋・高田楽天氏が写し、関係者に配布した残部と思われる。
- 一、写真の裏に文字のあるものと、ないものがあり、この記録をもとに配列した。
- 一、記録によれば、基礎工事深さ一丈底幅六尺、それに厚さ三尺のコンクリートを敷き、その上に煉瓦を積み重ね、柱の台石を置いている。しかし、この工程は重量計算で変化をつけている。
- 一、台石は、まず切石を据え、その後石工が柱に応じて製作している姿が見られる。
- 一、明治の事で、鉄筋を使用しているか否か不明である。
- 一、九州門司の永井力五郎氏寄進の樺材一万石を、いかにして三門下まで運搬して来たのであろうか。
- 一、主とした作業場は三門した、現在のガレージから新門通にかけての地域と思われる。
- 一、作業場から上までの運搬は、トロッコを用いている。
- 一、なお、同時に発見された写真に、大殿修繕のものが三枚あったので附す。この記録は『知恩院史』に、「明治四十一年五月二日御影堂屋根修繕に着手、六月五日起工御影を集会堂に御遷座申し上げ、工事費拾万円で竣工、阿弥陀堂落慶式と同時に落慶式を挙行す」……

第一項では、「昭和六十一年五月倉庫中」から見つけ出されたものを編集したといい、昭和61年以後に作成されたものとわかる。“倉庫”ということであるが、どこであろうか。とにかく知恩院に永らく収蔵されていたものを編集したということになる。

第二項では、この写真は“明治三十八年十二月十日、明治三十九年三月二日、京都の写

真屋高田楽天氏”が撮影、関係者に配布した残部、であろうとされている。写真の裏に「高田楽天 寄贈」と明治38年12月10日の墨書き、○朱印で中に楽天の陽刻と明治39年3月2日の青色刻印の二種類が認められる。これが編者の言うところの根拠である。ほかに写真の説明のみのものもある。本冊子の編集方針は、これを手がかりに編集したと第三項に記される。

次の第四、五、六項は、基礎工事の様子を述べる。基礎工事は“一丈底巾六尺”3mの深さ、幅1.8mこの深さで、“三尺”0.9mの“コンクリートを敷き”その上にレンガを積み重ねて柱の台石とする。台石は切石を組み合わせたものであるという。“ここに鉄筋を使用”の有無に触れている。鉄筋コンクリートの使用は明治23年に始まるが、果たしてどうであろうか。巨大なコンクリート塊とそのあたりを見渡してもそれらしき作業場所の痕跡は見当たらないのだが。

第七項で、“九州門司の永井力五郎氏寄進の檜材一万石を、いかにして三門下まで運搬”したかと当時の事情を慮りながら驚嘆しておられる。

第八、九項で、作業場とそこからトロッコで運び入れたことが説明されている。過日、写真を持ちアングルを見ながら撮影場所に立ってみた。現在の松と写真の松、まさに成長



の跡を認める。それ以外風景は同じである。

写真を仔細に眺めていると、人物はすべてポーズを決めていることである。手斧（ちょうな）を使う人の間に立つ人物は、右手に曲尺を持っている。この人物は棟梁であろう。曲尺は当時の大工のシンボルであり商標でもあったからであろうか。



“明治十二年四月阿弥陀堂再建事務所”から“明治三十年十一月門末集会……明治三十六年十一月起工……明治四十三年四月竣工、落慶”と『知恩院史』^(註1)は記す。明治11年の解体から明治43年落慶まで32年間の時間を費やしている。維新後の知恩院の経済が逼迫した事情、高額な建築費用と日露戦争の影響などがあったという。再建への援助者に“福岡門司の篤信者永井力五郎……檜材一万材を寄進”と特筆している。第七項の説明である。

一大篤信者永井力五郎について、少し興味もあり調査を試みた。本年度4月からネット検索が可能になった『浄土教報』にアクセスしたところ3件示された。ついでにと阿弥陀堂で検索すると20件を超えるものとなった。これには知恩院と関連のない阿弥陀堂があったので、知恩院阿弥陀堂の記事を確定し、それに永井氏の3件を時系列に整理したのが以下のものである。

《浄土教報》

明治29(1896)年12月5日	永井力五郎氏の特志	(272号7頁)
明治30(1897)年1月15日	総本山知恩院弥陀堂再建建言書	(276号11頁)
同	2月25日	永井力五郎氏の特使 (280号7頁)
同	5月15日	祖山阿弥陀堂再建の拳 (288号6頁)
同	12月15日	阿弥陀堂再建 (309号6頁)
明治31(1898)年3月15日	阿弥陀堂再建事務総監の就任	(318号3頁)
明治34(1901)年4月14日	華頂阿弥陀堂式地の地鎮祭は	(430号8頁)
同	4月28日	阿弥陀堂地鎮式の挙行 (432号6頁)
明治36(1903)年6月7日	阿弥陀堂建築委員長	(542号5頁)
同	7月5日	阿弥陀堂起工式 (546号4頁)
同	11月29日	阿弥陀堂起工式 (567号4頁)
明治37(1904)年1月10日	祖山阿弥陀堂問題	(573号5頁)
同	1月24日	阿弥陀堂工事の進捗 (575号5頁)
同	2月28日	阿弥陀堂に関する祖山の告示 (580号9頁)
明治38(1905)年11月20日	祖山阿弥陀堂工事	(670号7頁)
明治42(1909)年7月19日	阿弥陀堂新築報告法会	(861号4頁)
明治43(1910)年4月18日	阿弥陀堂上棟式及宗祖降誕会	(900号4~5頁)
同	4月18日	阿弥陀堂縁起及写真画 (900号5頁)

明治29年12月5日の記事は、永井氏が小倉真光寺の檀家で知恩院特別信徒の功績ある人と讃えたのである。翌年1月15日の報道は、永井氏が“……本宗の安心純華は専心称名往西邦に外ならず 是れ則ち大師開宗の順佛願の本懐なるべし……総本山なる知恩院に本尊安置の一大道場なきは何ぞや 各教化師は朝夕頻に弥陀一教利物遍増の旨趣を教示せらる々も言行一致の実を欠くべき乎……牛看賣犬の嘲嗤を免かれざるべし……奮励して斯の嘲笑の耻辱を雪かさるべからず 血あるもの情感あるもの此の言論を聞き激動せされは死灰のみ然らされは憤死せよ……”と1500字余の激烈な言辞で建言書を提出、これを契機に11月に門末集会での決議と、再建に動き出す。これ以降阿弥陀堂の再建に拍車がかかるようである。それでもここから12年後に竣工したのは戦争による影響である。

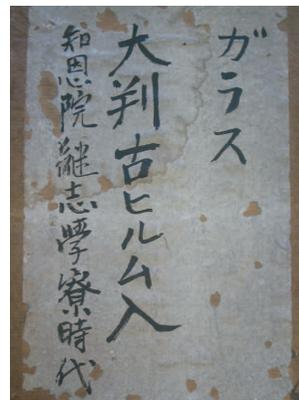
一万材の樺材が運搬されたことに浅野師は

驚愕しておられるが、永井力五郎は門司港を拠点とした港湾業に携わっており苦になるようなことではなかったであろう。大阪湾から牛車を連ねて運んだとの記事を思い出したりしている。

本学名誉教授 平 祐史氏に『知恩院阿弥陀堂考』^(註2)で阿弥陀堂の現在地への移転前史を考証された。そこで平氏は、はじめに梅原猛氏の弥陀一仏信仰である浄土教の道場が祖師施設の脇にあることへの疑義の一文に答えるように然上人の直弟子の追慕による祖師信仰の発露に因る、と述べられた。関東浄土宗が教義を重視する信仰、京畿の浄土宗が祖師信仰への傾斜はここに因を発するのである。篤信者永井力五郎の建言書の末尾に“弥陀堂再建を計画せられて本宗建立の根本的の秩序を正々堂々法幢を樹て……”というところに呼応するのではなからうか。

阿弥陀堂の落慶を記念し「阿弥陀堂由緒略記」と写真絵葉書二葉を全国門末に配布したという。これらの写真が使われたか不明である。宗祖700年遠忌を迎える前年に落慶、解体から32年を経過した悠長な事業であった。

三、知恩院継志学寮



≪29.5(縦)×22.5(横)×4.5(高さ)センチメートル≫

すすけた茶色の堅牢な紙箱が持ち出されてきた。渡された箱は思いのほかずりとした感触を受ける。なかにはガラスの乾板、1枚は破損をしている。数えれば32枚のガラス乾板。透かして見ると家族の写真、それも子供を中心に節句のころ撮影されたものようである。

箱に書かれた題字と内容が結びつかない。理由は「知恩院継志学寮」の語句は始めてのことば、これまで理解していた知恩院にはないことばであったからである。身近にある工具書を繰ってみる。ところが辞典・事典類には見当たらない。そうなるややはり「知恩院史」である。長い解説であるが、転記した。

華頂継志学寮

黒門内舊役院の地に在り、明治四十四年開祖七百年大遠忌の記念運動として、浄土宗徒有志によって組織されて記念継志會がその淵源となり、開宗七百五十年記念事業の一として大正十二年秋に知恩院が開設せるもので、浄土宗寺院及び信徒の師弟にして京都帝国大学、第三高等学校其他官公私立大学専門学校等へ通学する学生生徒（宗立学校生徒を除く）を厳選の上收容宿泊せしめ、祖廟の淨域静寂の地に、研学と修養と健康の増進を図らんとする実に知徳体三育兼備の好機関である。昭和五年善導大師一千二百五十年大遠忌奉修を機会に寮舎の改築をなし、現在建物三十九坪、在寮学生十数名あり、既に幾多の俊才を宗門内外に送り出している。(註3)

“華頂”と“知恩院”と異なるが、同一の意味と考えてよいであろう。継志学寮は、明治44年浄土宗祖法然上人700年大遠忌を期した記念継志会に始まり、大正12年（浄土宗）開宗750年に知恩院旧役宅に建設された育英事業である。記念運動から記念事業まで12年経過している。さらに昭和五年善導大師1250年

遠忌に改築をした。ここから多くの俊才を送り出したという。

記念継志会から華頂継志学寮、知恩院継志学寮への展開が考えられるが、趣旨とか内容など、なお要領を得ないところがある。記述に端折られたような感じがするのである。これに伝えてくれるであろう資料は、やはり『浄土教報』によらねばならない。記念継志会、華頂継志学寮、知恩院継志学寮を基礎語彙に検索を試みた。該当した検索事項を時系列に従い以下に整理をした。

明治44(1911)年2月27日	遠忌記念継志會の設立
明治44(1911)年5月1日	記念継志會の近況
明治44(1911)年7月3日	記念継志會の活動
大正2(1913)年5月26日	記念継志學寮の近況
大正3(1914)年9月4日	継志學寮便り
昭和2(1927)年8月26日	導祖忌記念事業として華頂継志學寮改築案
昭和3(1928)年1月1日	華頂継志學寮 増築の計畫

明治44年2月27日の記事は、法然上人七百年大遠忌行事の一環として記念継志會は計画された。「記念継志會併に継志学寮設立趣意書」に“百萬辺知恩寺山内了蓮寺中記念継志學寮”を本部とするといひ（2月27日記事）、記念継志会会則も制定されている。評議員は大鹿愍成、小林瑞浄、伊東（東は誤記、藤である）祐晃、大島徹水の四師が名を連ねる。四師は宗内教育界に重要な足跡を残している。了蓮寺は、伊藤師が止住するところである。東洋学者内藤湖南等との交誼もあり、京大に進学する宗門師弟などの世話をしたという。中国仏教史学者塚本善隆師は女婿である。塚

本氏は、師が畢生の業とされた浄土宗史の遺稿をまとめ『浄土宗史の研究』を刊行した。記念継志学寮は、京大に隣接した地を生かした育英事業として始められたのである。

5月1日の記事は、京都大学学生集会所で「宗祖大師七百年御忌記念講習会」を開き、講演次第は「法然主義の教育—大村桂巖、七百年の意義—野々村直太郎、明照大師—岩井智海師、法然上人と親鸞上人—望月信亨師」で、当代の碩学が務めた。「聴衆は多数と謂ふにあらざしが」と状況を正直に吐露しながらも会の発足を喜ぶ。

7月3日の記事は「二府兵庫三重滋賀福井」に理事定恵苗、山鼻聰瑞（のちの前田聰瑞）小林義道を派遣し篤志家を募る活動をする。大正2年5月6日の記事から、山鼻、定両師は京都帝大文科学学生、小林は三高生、彼らは宗門子弟であることを紹介。

大正3年9月4日記事は、山鼻文学士は高野山大学教授、定文学士は上宮中学校へと赴任、そして新たな入寮者を迎えて、寮は清新な気分と伝える。

大正3年の記事までは了蓮寺中の学寮生活を報じたもので、“記念継志学寮”と呼称されていた。『知恩院史』の記述に端折られたような印象をもったと述べたが、ここの経緯が書かれなかったためであろう。浄土教報での記事はここから一気に昭和の記事にはいる。

昭和2年8月26日の記事は、「知恩院山内の継志学寮は専門学校以上の者で末寺内の優秀学生を収容……寮長井川定慶氏指導の下に……」と、建物は古い寺院を改造したもので改築もしくは補修して、いまの人員に倍する30余人を超える収容力あるものしたいと、昭

和5年に迎える善導大師1250年大遠忌の記念事業にと企画。しかしこれに賛否両論あって困難さを報じている。

昭和3年1月1日には、「……帝大三高等に通ふ寮生の増大に伴ひ、知恩院当局の好意で兎も角南寮を増設され、……関係者は此の種事業に理解ある篤志家と協議重ねている」と、進まぬ増築のことを報じている。これ以後浄土教報では記事はない。知恩院史は昭和5年善導大師大遠忌に完成したように記述している。

記念継志会に始まって学寮の所在地を見てきた。またこれらは浄土宗法然上人の遠忌、開宗記念と節目において行われた事業である。しかし単に催行であったと理解してはならない。記念継志会は東京で始まった興学舎運動に啓発されたのであり、興学舎は東京で宗派を越えた宗教者の集まりである道交会に始まる。この団体の活動内容は教育振興を考えており、子弟教育に力を注いでいたようである。この精神を受け継いで京洛で記念継志会を起こしたのである。明治44年2月27日の記事の書き出しで「遠忌を記念して東京における記念興学舎の如く宗門僧侶にして官私の大中学に学ぶものの為に京都の有志……」が集い「笈を負ふてこの地に集まる者」に「切磋琢磨」し「宗門の綱領を示し、以て自他共に修徳に荒まんと欲す」する場、それが記念継志学寮であった。浄土宗教団は、維新以降、教団を揚げて子弟教育に力を注ぎ東西の地で競ったものようである。

先日、百万遍了蓮寺に電話でお尋ねしたところ継志学寮に関する資料は残っていないとのこと、また浄土教報が伝えるような話は伝えられていないということであった。ただし

平成10年まで興学舎と名づけられた学生寮が東大路通りに面してあり、いまの百万遍知恩寺駐車場であると。京都新聞平成2年11月21日付けで寮の由来記事が掲載されているとのことであった。記事によると、了蓮寺山内が新京極にあった頃、境内には芝居小屋「錦座」があった。明治41年頃から百万遍知恩寺山内に移転することになり、それに伴って芝居小屋も移築された。しかし芝居小屋は内部を改装し学生寮とし、寮名を興学舎と名づけた、という。ただ了蓮寺内にもう一棟寮があったが、いまは物置となり寮名は不明であるとのこと。興学舎は先述した意趣を受けての命名かとも思う。ここらはもう一度調査しなければならない。

了蓮寺に始まった記念継志学寮は、明治44年から大正11年まで百万遍知恩寺山内にあり、大正12年から昭和22年まで知恩院山内にあった。先年、創立記念講演会で講演された栄久庵憲司氏は、仏教専門学校入学、のちに東京芸術大学に転じ工業デザイナーとなり、その業績は周知のところである。氏の履歴に昭和22年華頂継志学寮の在寮中に寮長藤吉慈海師の訓導を受けたという。藤吉慈海師も戦前、継志学寮にあり、後に三河大樹寺、鎌倉光明寺に晋董された。ここから俊秀が輩出した証左であり、その一端を物語ってはいないだろうか。

四、まとめ

二つの資料を通して、明治大正にかけての浄土宗門の活動の一端に触れた思いがする。

これに類する資料がまだ散見される。この稿の校正を終えようとするとき、戦前、佛教専門学校教員による金沢文庫での浄土教典籍の調査が行われ、そのとき撮影されたと思われる金沢称名寺『群疑論疑芥』『群議論見聞』ガラス乾板327枚を収めた箱を見つけ出した。巻号丁数などが錯綜しているために急遽整理を始めたが、やはり破損したものがあり保存の策を講じることを考えねばと思っている。また、浄土宗総合研究所から『宗粹』のデジタル化の協力依頼があった。これは『浄土教報』の先駆的な宗教雑誌である。これも紙質の劣化がはなはだしく、また欠号補充も困難な状況にある。浄土宗文献室、図書館所蔵のもので補い、欠号等は他の所蔵機関の協力を得て完全化を図るべきであろう。浄土宗総合研究所の依頼はその好機と思う。整理、梱包するまでに何とか明らかにしておきたいと考えている。しかし時間も残り少なくなっており後事を託することになる。調査する段階でこの時代を“社会事業の浄土宗、学問宗の浄土宗”と評された時代であったとのことばに触れた。この時代の事跡をもう一度見直し次の世代に伝えたいものである。

了蓮寺への仲介をとっていただいた樹下隆興氏、赤尾弘顕師、協力を得た藤堂祐亨君にここで御礼を申し上げる。

付 記

(註1)『知恩院史』836頁

(註2)『鷹陵史学』第8号(1982年2月)298-310頁

(註3)『知恩院史』534頁

(図書館参与・みわ はるお)

「佛敎大学図書館ポータルサイト」の将来像

飯野 勝則

(1) はじめに

本年度の図書館における最も大きな変革は、Webを通した非来館型のサービスを充実できたことだといえるでしょう。これは佛敎大学図書館が「図書館の開館時間中に、図書館を訪れた」利用者へのみサービスを提供する、という従来型の図書館から、僅かではあるが足を踏み出せたことの証明になると考えています。

そもそも北米の図書館に端を発する、図書館の非来館型サービスを充実させる動きは、全世界を巻き込んだ後戻りのできない潮流となっています。

いわゆるOPACにはじまり、電子ジャーナルやオンラインデータベースの提供、Web上での個人別貸借状況の表示やILLの申込提供…など、その範囲はきわめて多岐にわたりますが、どれもが図書館においては、今後必要とされる項目ばかりです。この十年の技術革新の中で、図書館ほど大きな影響を受けた、大学の附属施設は、他にはないかもしれません。

現在の図書館は、多くの方がイメージしているであろう「本や雑誌を薄暗い書庫の中に保存しているだけ」の場所ではありません。すでにそういった図書館は過去のものになりつつあるのです。

本年度に図書館の思いを凝縮し、具現化して公開するに至った、図書館ポータルサイト。この使い方については、『輪蔵だより』その他

で、紹介していますが、その存在意義や「なぜこんな機能が必要なのか」ということについて、今まで述べる機会がありませんでした。

図書館が今、Webを通して何を行っているのか。そして利用者は何を行うことができるのか、そして図書館が目指すべきことは何なのか。せつかくの機会です。この場を借りて、皆さんにお伝えできればと思っています。あくまでも機能面からのアプローチになりますが、何らかの思いを感じ取っていただければ幸いです。



▲2008年2月20日現在の図書館ポータルサイト

(2) 論文統合検索

—有料電子コンテンツ対象の検索エンジン

図書館ポータルサイトをささえる、もっとも重要な機能が「論文統合検索」です。この数年間で、佛敎大学で購読を行っているWeb仕様の有料電子コンテンツは飛躍的に増大しています。以前であれば、電子ジャーナルか

ら、目的の論文を探し出そうと考えた場合、これら電子コンテンツの供給元である、各データベースサイトを訪れて、検索を行ったり、ブラウジングをすることで、特に時間的なロスを感じることもなく、目的とする資料にたどり着けたかもしれません。しかし、現在ではそういった方法は、確実に難しくなっています。電子ジャーナルに代表されるような、電子コンテンツの供給サイトは増加の一方です。確かに慣れた利用者であれば、どこに何の資料があるか、事前に判断できるので、まっすぐ目的のデータベースサイトにアクセスできます。しかし初めて図書館の電子コンテンツを利用しようとする人にとっては、まず目的とする電子コンテンツが、どのデータベースサイトで供給されているものなのか、把握することすら難しい状況が生まれているのです。ごく普通のインターネットサイト上の電子コンテンツであれば、Yahoo!なりGoogleなりを使うことで、簡単に目的のコンテンツを探し出せることは皆さんもご存知のことでしょう。しかし有料サイトという場合にはそうもいきません。

そこで登場したのが、有料電子コンテンツの統合検索という概念です。大学などが個別に契約をしている有料データベースサイトなどをYahoo!やGoogleを使うようにまとめて検索する機能があれば、いわゆる初心者に対して、目的の電子コンテンツへの最短ルートを提供することが可能になります。これは電子コンテンツの利用促進及び利用者の裾野を広げる上で大きなメリットとなります。

それだけではありません。日頃からデータベースの利用に習熟している人にとっても、思いがけない発見を行うきっかけとなりえます。というのも、自分が予想もしなかったデ

ータベース上に、関連資料を発見するきっかけとなりうるからです。まさに、果てしなく広がるデータベースコンテンツ世界の有機的結合をもたらす、画期的な技術革新であるといえるでしょう。

さらにこのようなシステムは、費用対効果の向上という点でも有効です。利用者に自然な形で、有料データベースへの誘導を行えるというポイントを見逃してはなりません。

統合検索システムの導入によって、このような状況が世界の図書館の中に生まれつつあり、さらにその効果が実証されつつあるという現実を踏まえると、本学図書館もただ座して見ているわけには行かないと考えるのは、ある意味自然な流れとも言えるでしょう。かくして本学図書館では、幾つかの統合検索システムの中から、ProQuest社の「マルチサーチ」というシステムを導入するに至りました。

図書館ポータルサイトの中央部に、情報検索用の複合窓があります。ここで「論文統合検索」を選び、検索を行うことで、佛教大学で購読できる電子ジャーナル等について、一括して全文検索を行い、その結果を一覧で表示することができます。またその感覚は、一般の検索エンジンに似ているため、異和感なく使用することができます。

とはいえ、このシステムは欧米の技術をベースに構築されているため、日本語の検索技術は決して高いとはいえません。例えば漢字は、新字体と旧字体、簡体字など、多くの種類がありますが、「字体は異なるが意味は同じ」という場合、それを統合して検索するというような対応ができません。「説」「說」「说」はそれぞれ全く異なる字として検索されます。一般的な図書館OPACであれば「漢字統合インデックス」の適用により、このような状況

は避けられるのですが、残念ながらこのようなインデックスの採用には至っていないようで、そこが最も大きな問題であるといえます。なぜなら、これは不必要な検索もれを招き、利用者の情報検索能力を低下させる一因となるからです。

こういった部分の改善は、当然、今後行われるべきであると考えていますが、そのためには、日本での利用者の一層の増加がほしいところです。

(3) 雑誌名検索

—図書館所蔵雑誌と電子ジャーナルの統合検索

佛敎大学で閲覧できる電子コンテンツは、ここ数年で飛躍的に増大したということは先に述べたとおりです。しかしここで、ある問題が生じてきます。

それは「どこに行ったら雑誌を見られるの?」という、単純ではありますが、重要な示唆を含んだ問題です。

今までは冊子体として本学に所蔵されている雑誌のみが、本学のものとして閲覧することができる、と考えていればよかったのですが、電子ジャーナルが急速に普及した現在となつては、そのような紋切り型の認識は通用しなくなってきたのです。

電子ジャーナルは、確かに本学で読むことができる雑誌コンテンツです。しかし本学のどこを探しても、電子ジャーナルが「置いてある」書架はありません。つまり本学には所蔵「場所」がないのです。何か新しい案内のシステムを作らない限り、これでは利用者の皆さんが、電子ジャーナルにたどり着くことはできないのです。

確かに雑誌を検索するのにOPACを使うことはできます。当然ながら、OPACでは、本

学に所蔵された冊子体の雑誌については、正確に検索できますし、その場所についての情報を提供することができます。でも電子ジャーナルについては、供給元の都合でURLという「場所」が随時変化する…などという事情もあり、本学では正確には把握できません。これではOPACを通して、電子ジャーナルの全ての正確なデータを提供することは不可能です。

その上、電子的な「複本」の問題がありません。

例えばある雑誌について、Aというデータベースは2000年から2007年分までを提供しているだけですが、Bというデータベースでは1970年から2004年分まで読むことができる…などという状況が実際に存在しています。この場合、自分の読みたい年代を踏まえた上で、適当なデータベースを選ばなくてはなりません。しかし、そこにも技術や知識が必要です。正直初心者では何らかのツールがないと苦しい…。

そこで本年度に導入したのが、佛敎大学図書館の所蔵雑誌及び購読可能な電子ジャーナルのすべてについて、そのタイトルを統合検索する「雑誌名検索」のシステムです。検索結果には所蔵先や電子ジャーナルURLへのリンクなどの機能がついております。電子ジャーナルについては、収録年についての表示もありますので、先ほどの電子的な「複本」問題も解決します。

図書館ポータルサイトの中央部に検索用の複合窓があります。ここで「雑誌名検索」を選び、目的とする雑誌名を入力し、検索ボタンを押すだけで佛敎大学で閲覧が可能かを調べることができます。なお雑誌名の検索のみでしたら、学外の端末からもアクセス可能に

なっています。

また「どんな雑誌があるのか一覧でブラウジングしたい」という要望もあると思います。そういった方のために、電子ジャーナルと図書館収蔵雑誌を合わせてブラウジングできる機能を用意しました。雑誌タイトルの先頭の文字を選ぶことで、タイトルがリスト化されて表示されます。これにより一つの画面の中に類似したタイトルなどが並ぶことになり、一目でどのような相関雑誌が購読できるのかを知ることができます。

このシステムですが、もうひとつ「リンクリゾルバ」という機能を有しています。これはマルチサーチや各種データベースを検索した際に、その検索結果に現れた論文などについて、その全文を閲覧できるサイトまでのリンクを自動で構築するという機能です。例えば、本学で多くの方が雑誌の記事検索用に利用している「マガジンプラス」というデータベースがあります。このデータベースを検索すれば、目的とする記事が掲載されている雑誌と巻号を速やかに見つけ出すことができます。一般に掲載雑誌と巻号を見つけたら、続いて本文を閲覧しようとするのが自然です。しかし以前は、これらデータベースとOPAC、あるいはデータベース間を有機的に結合するようなシステムを持っていなかったために、閲覧を試みる場合には、雑誌名や巻号の情報を紙などに一旦控え、改めてOPACや他のデータベースで検索するという手間が必要となっていました。

しかし今はそのような必要はなくなっています。データベースとデータベースを雑誌情報で結びつける「リンクリゾルバ」機能のおかげで、「マガジンプラス」の検索結果からは、所蔵雑誌までの道のりを最短で表示するリン

クボタンが出現するようになったからです。

このような機能は決して新しいものではありませんが、所蔵雑誌へのアクセスの簡略化という点で利用者の方の利益は大きいと考えています。電子ジャーナルなどの「死蔵」を防ぎ、利用率を向上させるという点から見ても有用なものとして期待されます。

(4) データベースを使いやすくするために

電子コンテンツの充実の背後には、ネットワーク上で利用できる多くのデータベースサイトの存在があります。これらデータベースには、本学以外の大学等にもサービスを行う、インターネット上のデータベースと、本学の中のみで利用できる、イントラネット上のデータベースの二種類が存在しています。図書館では従来、この二つを別々のものとして扱い、図書館ホームページなどでも別々のページで紹介してきました。またOPACでは、DVDなどの形で、蔵書として「購入」した、一部のイントラネット上のデータベースの存在しか周知することができませんでした。このため利用者の方がデータベースに対して、自在にアクセスするのは非常に難しく非効率な状況でありました。

そこで図書館ポータルサイトでは、これらインターネット、イントラネットで利用できるデータベースの存在をどのように利用者の皆さんに伝えるのか、またタイトルだけでは分かりにくいデータベースの内容をどう知ってもらうのか、この点に重点を置いて設計を行うことで、状況の改善を目指すことにしました。

まず佛教大学の端末で利用可能なデータベース、およそ170種類について、簡略なレポートを作成し、Web上でその内容を公開しま

した。そしてその全てに起動用のリンク、もしくは利用可能な端末の案内を書き加えました。さらに「新聞」「仏教」等、分野別にカテゴリ分類を行い、利用者が興味をもった内容のデータベースをブラウジングしつつ、違和感なくアクセスできるような環境の構築を目指しました。

また同時に、現在ではインターネット上の情報検索が、カテゴリ検索から単語を用いたキーワード検索にシフトしつつあること、そして170種類に及ぶデータベースをブラウジングしていくのは、おそらく面倒と感じる利用者もいるであろう、という状況を踏まえ、これら端末の名称、内容の解説をリスト化・インデックス化し、高速検索が行えるデータベースシステムを公開しました。言わば、これは佛教大学オリジナルの「データベース」の「データベース」であるといえます。

この検索結果には、カテゴリでの検索と同じように、起動用のリンクを作成し、ダイレクトなアクセスができる環境を整えました。

なお、この「データベース」の「データベース」ですが、現段階では学内の利用者向けのデータベースを紹介するものと、学外からも利用できる無料のデータベースのみを紹介するものと、二種類を並行して公開している状況です。

(5) OPACとデータベースの検索データを管理する

さてOPACやデータベースなど、各種の電子情報があふれてきた状況ですが、こういったところで得られた情報を利用者はどう管理していくか、というところに新たな問題が生じてきます。例えば、従来型の「紙」にメモするなどして保存し、整理をすることも可能

ですが、検索や文献調査など、全てが電子ベースで行われているのに、参考図書のメタデータなどを紙におこして、改めて紙ベースの管理を行うのは非効率かもしれません。また調査を進めていく中で、大量の検索履歴や参考図書、参考論文などが出現しますが、あとから「そういえばあの本はどこにあるんだっけ?」とか、「あの論文はどのデータベースからダウンロードしたんだろう?」と、古い記憶からデータの出所を探さなくてはならないような状況が、出現するかもしれません。こんなとき無論、紙ベースで記録された古いノートを参照していくのも、もちろん有効ですが、それでも時間がかかってしまったり、見つけられないなどという事象に遭遇するかもしれません。そのうえ、紙ベースでは、紛失というリスクも伴います。

そこでこういった状況を解決する手段として生まれたのが、個人に特化したWebベースでの文献管理システムです。個人IDをWeb上に作成することで、OPACを通した参考図書の検索結果や、電子ジャーナルのダウンロードファイルなどを、個人専用のHPの中に記録し、データベース化していくことが可能になっています。あくまでもデータベース化ですので、あとからこれらのデータについて検索を行って、目的のデータを見つけ出したりすることもできます。またWebベースでの管理ですから、大学の構内だけではなく、ご自宅などからも、インターネット環境が整ってさえいれば利用が可能になります。

ただしこのような文献管理システムの利用といっても、システム自体がOPACのように普遍的に普及しているものではありませんから、利用者にとっては「イメージがまるで湧かない」というのが本当の感覚だと思います。

つまり「使い方が簡単なのか？難しいのか？」、「どうやってデータを登録したらいいのか？」というところが最も大きい問題になりえます。つまり、いくら性能がよくても「使い方」が難しいと何の意味もありません。

本学では、図書館ポータルサイトの一機能として、北米を中心として広いシェアを確保する「RefWorks」を採用するに至りましたが、このシステムは比較的、「使い方」という点に工夫の跡が見られます。それは「ログインをして、データベース側のボタンを押してもらう」という簡単な操作で、次々とデータを登録できる機能を前面に押し出しているからです。

例えば既にRefworksにログインをしていたとします。本学のOPACについては、検索結果から必要な書誌データの先頭に「チェック」をつけて、「RefWorksにエクスポート」というボタンを押すだけで、管理すべきデータがRefWorksに登録されていきます。また統合検索を行うマルチサーチにおいても、検索結果から必要な論文データの先頭に「チェック」をつけ、上部の「RefWorks」というリンクをクリックするだけです。

たったこれだけの操作でデータベース間の連携が図れるということは、大変に画期的であるだけでなく、この仕様が今後、データベースにおいて標準化されていく可能性を感じさせるに十分であると考えます。

現在、このような簡単な操作でRefWorksにメタデータを登録できるデータベースや電子ジャーナルとしては、上記のOPACのほかEBSCOhost(Academic Search Elite, PsycINFO, PsycArticles)、医学中央雑誌、ProQuest5000、CSA (Sociological Abstract, Social Service Abstract, ERIC, SAGE) などが用意されてい

ます。ただし、これ以外のデータベースでも、マルチサーチを通して検索することで、事実上、ワンクリックでの登録が可能になっているものが多数存在しています。

まだまだ、日本においては、こういったWebでの文献管理は一般化してきていませんが、その利便性には特筆すべき点も多く、やがては珍しいものではなくなるにちがいないと期待しています。これからの一層の普及に期待しているところです。

(6) リクエストサービス

図書館と利用者の間には二つの情報が存在しています。一つが「利用者全てに向けて発信すべき情報」で、もう一つが「個別の利用者ごとに提供すべき情報」です。すなわち、図書館から発信される情報には、パブリック向けの情報とプライベート向けの両者が存在していることとなります。ここまで紹介してきた検索関係の機能が提供する内容は、全て前者のパブリック向けの情報でしたが、当然後者のプライベート向け情報についても図書館としては、何らかの手立てを講じなくてはならないと考えます。特に、後者に付随する部分で、特に対面でなくとも、ある程度サービスが行えるものがあったら、それはWebを通じて行いたい…そういった流れは今この図書館界の中で主流になりつつあります。

今回の図書館ポータルサイトの開設に当たって、図書館が重要視したのもこの考え方でした。従って、今回の「リクエストサービス」の導入は半ば必然であったと考えます。

「リクエストサービス」には、図書館から利用者個人に向けて供給される情報である、「貸出・予約状況の照会」等を行うことができるほか、利用者個人から図書館に向けて「購入

希望図書の申込」あるいは「文献複写・現物貸借の申込」といった個人ニーズに特化した情報を発信することができます。このことは図書館と利用者個人の間で、ポータルサイトを通じた、双方向での情報のやりとりが行えるようになったことを意味します。このようなWebを通じた個人情報サービスの双方向化は、その利便性とあいまって、これからの図書館においては、ますます重要視されることになるに違いありません。

残念ながら、現段階では「リクエストサービス」により提供されるサービスには、限界があります。全てのサービスを全ての本学構成員に提供できているわけではありません。しかし、今回初歩的ながら図書館が新たな機能を導入できたことで、新しい形式のサービスを普及させる第一歩は踏み出せたと確信しています。

(7)『輪蔵だより電子版』の目指すもの

さてこういった図書館が持つ新しい可能性、新しい概念をどのように利用者に周知していくべきなのか、実のところ、ここが図書館の変革を考える上でもっとも重要な部分です。「図書館は本や雑誌という冊子のみを保存する場所でなくなりつつある」、そのことすらも図書館にあるもの以外には、まだ身近な感覚になっていません。インターネットという形で、利用者個人は電子情報に接する機会が増えましたが、その電子情報と図書館が如何にかかわるのか、そのことを結びつけて考える機会、やはり多くありません。一般論として、日本において「図書館員の仕事にもつイメージはどうですか？」という問いを發したところで、「暗い」とか「暇そう」「楽そう」などという、漠然としたネガティブなイメ

ジは現れるかもしれませんが、なかなか「先進的」とか「コンピュータサイエンスの知識が必要」、「否応なく理系的素養が望まれてきている」といった答えは返ってこないかもしれません。

ネガティブなイメージが先行するために、仕事を遂行する上での障害が生じていること、そして場合によっては閑職と扱われるようなひどい誤解まで受けてしまう、そういった状況は、日本の図書館員が共通に体験する事象のように思われます。

この原因がどこにあるのかを追求することは、非常に困難かもしれません。図書館行政のあり方や社会の急激な変化など、要因は複合的であると考えからず。しかし一つだけ確実にいえることがあります。その責任の一面は図書館、そして図書館員にもある、ということです。有効に声を発していないがために、現在の図書館の実態を万人に伝えきれていない、ということです。

多くの図書館、そして図書館員は従来、図書館のあり方についての情報発信をあまりしてこなかった、これは間違いのない事実でしょう。佛敎大学図書館もその一つであったことは否定できません。とはいえ、過去はそれでもよかった。インターネットもなく、情報の拡散は、現在ほど著しい速度を有してはいなかったからです。『図書館報』や「情報リテラシー教育」などで、利用者に情報を提供することでも十分こと足りていたのかもしれませんが、現在ではそうはいかない。インターネットの普及により、情報の拡散速度は著しく高速化しています。新聞など多くのメディアは、ホームページを通して最新の記事を配信し、ブログなど個人レベルでも、情報を発信する人々が無数に存在しています。

多くの大企業も広告の手段をインターネットに求めている状況です。もはや情報を発信できない組織は、情報の海の中に埋没し存在感を失ってしまう。そこまで状況は切迫しています。

図書館は、歴史的に「知の宝庫」でありました。この場合の「知」とはすなわち「情報」であるといえます。冊子体の書籍という形態にまとめられた情報を集め、そして管理し、後世へと伝える…そういった学術情報の中心であり続けてきました。「図書館に情報がある」という「情報」は、歴史の中で普遍的なものと考えられ、図書館の重要性を人々に認識させてきました。この「情報」は図書館が発し、そして一種の伝承として、長い時間をかけて、世界の隅々まで拡散することで、図書館の地位は確定してきたといえます。

しかしその「情報」は、この情報革命とも言われるインターネット社会の成立により、氾濫する情報の中に埋没しつつあります。情報拠点としての図書館の地位低下が始まっているのです。人々が情報を求める先は図書館における、専門家による監修が施された冊子体の「辞典」から、インターネット上で万人が手を加えてきたWikipediaに変わりつつあります。典拠や正確性を重視すべき図書館員ですら、Wikipediaを使っている姿を目にします。何故このような状況になっているのでしょうか？

その要因のひとつは、情報の豊富さと速さ、アクセスの手軽さにあると考えられます。人々は多少の正確性に目をつぶっても、簡単に、そして確実に手に入る情報を欲しているのです。これは我々図書館、そして図書館員に多くの示唆を与えてくれます。

「図書館は情報の拠点である」はずなのに、

インターネットを通じて、多くの情報を発信できない。「正確で新しい情報を収集している」はずなのに、利用者からは図書館がもっている情報が何か分からない。しかもどうやってその「正確で新しい情報」に接したらいいのか分からない…。情報を手に入れる手段として、「今、一番利用されているはず」のホームページには、何の情報もなく、ほとんど更新もされないまま…。

これでは利用者にとっての図書館イメージは、現実から乖離する一方なのではないでしょうか。だとすれば図書館の「知の宝庫」としての、そして情報の拠点としてのステイタスは完全に消えてしまいます。

図書館が、図書館員自身が、インターネットを通して、積極的に情報発信をする。そういった姿勢が間違いなく必要です。私が思うにこれが「図書館広報」の重要性の根幹であると考えます。

かくして、こういった概念のもとに生まれたのが、図書館ポータルサイトのコンテンツの一つである『輪蔵だより電子版』です。しかし理念は崇高なのですが、未だ人的パワーの不足から、更新・記事のアップなどを含め、理想的な運営ができていません。更なる工夫と、てこ入れは絶対的に必要であると考えています。

(8) 電子資料庫のあり方

図書館ポータルサイトでは「電子資料庫」と呼ばれるコンテンツへのリンクを提供しています。この電子資料庫は、いわゆる電子図書館として、現在本学が誇るべきコレクションである『浄土教報』を創刊から終刊に至るまでの全ての巻号について、見出しをデータベース化し、電子画像とともに学内公開して

います。

また図書館収蔵の貴重書についても、試験的に公開を行っています。こちらは学内だけでなく、学外からの閲覧が可能になっています。

このような電子画像等、図書館独自の電子コンテンツの公開ですが、ここには大きく分けて三つの意味があると考えています。どれも図書館に籍を持つものの中では、言い古されたことではありますが、図書館にあまり縁のない方にとっては、目新しい部分があるかもしれません。今回、再度この機会を利用して「広報」し直して見たいと思います。

ひとつは、貴重な価値を有する資料を電子画像の形で公開することで、①現物の閲覧出納を極力押さえ、資料の劣化を防ぐ、ということ。二つ目が先ほどの図書館広報の話題につながる、②強い「広報」的役割を担うコンテンツを作成するという。そして、③文化的財産を広く社会に公開することによる社会貢献、ということです。

①については、当たり前のことです。図書館が資料の保存を担う場所である以上、このような考え方で、資料の電子化を進めていくことは、資料を生み出した先人に対する責任であり、また資料を伝えていくべき後世の人々に対する責任でもあります。

さて②については、例えば本学にしかない特色あるコンテンツを公開することで、利用者を積極的に図書館ポータルサイト、あるいは大学のホームページに導くことができます。現在、オープンアクセスジャーナル、あるいは機関リポジトリが、所属機関のホームページの付加価値をどの程度高めるかという研究が、各国の研究者の手でなされていますが、電子図書館についても同じような効果を期待することができます。多くの利用者、あるいは

潜在的に図書館に興味をもつ人々をひきつけ、そして図書館のみならず大学のホームページの価値を増大させることが、大学そのものの存在価値を高めることにつながるということを強く認識しなければならないでしょう。それほどまでにインターネットの影響力は大きいのです。

③についても、①と関連する概念で語ることが可能です。実のところ、もはや貴重な資料を図書館が、そして大学や機関が、極端なことをいえば国家が「独り占め」する時代は過ぎ去りました。この点についても、正しい認識が必要になります。権利関係に問題のない資料の公開を惜しむというような姿勢は、もはや通用しなくなっています。「死蔵は学問研究の進歩を阻害する」のです。大学や、機関、国の枠を超えて広がる電子図書館の積極的な構築は、「その資料を使う誰か」のために、大きく開かれた窓となっています。これは図書館が行うべき積極的な社会貢献の一つといえます。

慶応大学はGoogleと協力し、著作権のきれた約十二万冊の図書に関し、電子化をすすめ、Googleのブック検索を通して全世界に公開を試みています。当たり前ですが閲覧に際し、課金はされません。これはミシガン大学やハーバード大学といった海外での事例を踏襲することに過ぎませんが、これにより「その資料を使う誰か」に思いもかけない学問上の出会いを提供することは確実です。もちろん広報としての多大な効果もありますが、社会貢献としても無視できないものがあります。

残念ながら本学図書館において、現段階では、ここまでのことを行う力はありません。しかし、それでも浄土宗を代表するような、またアジア研究において素晴らしい価値を有

するような資料を所蔵していることもまた確かであり、これは未来に対するすばらしいシードとなりえます。

本学の電子資料庫は、未だ黎明期にあります。今後重点的に公開資料の充実をはかり、理念を現実近づけていければと、切に願う所です。

(9) おわりに

ここまで図書館ポータルサイトの理念や各機能の将来像について、色々と述べてきました。現存する各機能については、その目指すものについて、ある程度ご理解いただけたものと考えています。

さて最後になりますが、図書館ポータルサイトが現在持っていない機能について、将来的な構想を踏まえた上で言及してみたいと思います。

図書館ポータルサイトの多くの機能は、現在佛教大学の構内からの利用に制限されています。これは電子ジャーナルや統合検索を提供するマルチサーチについて、不正利用を防ぐためには当然必要なことではあります。しかし、本学の構成員が自宅から利用しようと思っても利用できないという状況は、非来館型サービスの充実を図るという考え方から言えば、決して望ましい状況ではありません。従って、この問題を解決するため、例えばVPNを利用したりリモートアクセスができる環境などを整えていくという方策も考えねばならないでしょう。こうすれば、たとえ本学構成員の自宅からであっても、契約に問題のない範囲で電子ジャーナルなどの利用が可能に

なり、図書館ポータルサイトの機能性は大幅に拡張します。

リクエストサービスの拡充も課題です。現状では機能的な問題から、通信教育課程の学生に対して、十分なサービスが提供できる状況ではありません。この部分についても、システムの改善を必要とすると考えています。特に現在FAXやe-mailを通してサービスを行っている部分について、ポータルサイトを通じたWebサービスを如何に行うのか、検討を行う必要があります。

さらに「広報」的観点から考えてみると、個別データベースに対する利用方法などをどのように利用者に周知すべきか、考えなくてははいけません。データベースにアクセスしたところで使い方が分からなくては、データベースを十分に生かしているとは言えないからです。また、もっと具体的に言えば、資料調査の道筋を順序だてて説明するような、パスファインダー機能を充実させる必要もあるでしょう。

いずれにせよ、図書館ポータルサイトを核として、今後拡張できる機能は、豊富に存在しています。利用者の求める情報と図書館の供給する情報にずれが生じないように、着実に前進できればそれに越したことはありません。

図書館界は今、未曾有の変化の只中にいます。その事実直面していることを正しく認識し、如何に向き合うか、日本中、いや世界中で図書館の真価が問われているのではないのでしょうか。

(図書館専門員・いいの かつのり)

平成19年度図書館関連委員会 委員名簿

○図書館委員会

◎：委員長

○：副委員長

- 池見 澄隆 (副学長)
- 原田 敬一 (文学部長)
- 東山 弘子 (教育学部長)
- 広瀬 卓爾 (社会学部長)
- 岡村 正幸 (社会福祉学部長)
- 濱 弘道 (保健医療技術学部長)
- 門田 誠一 (文学部総務担当主任)
- 石原 宏 (教育学部総務担当主任)
- 千葉 芳夫 (社会学部総務担当主任)
- ◎藤松 素子 (社会福祉学部総務担当主任)
- 望月 晃二 (保健医療技術学部総務担当主任)
- 小林 隆弘 (財務部長)
- 山崎 高哉 (図書館長)
- 徳森 京子 (図書館課長)
- 古川 千佳 (図書館専門員)
- 竹村 心 (図書館専門員)
- 飯野 勝則 (図書館専門員)
- 志麻 克史 (図書館専門員)

○図書館収書委員会

- ◎門田 誠一 (文学部総務担当主任)
- 石原 宏 (教育学部総務担当主任)
- 千葉 芳夫 (社会学部総務担当主任)
- 藤松 素子 (社会福祉学部総務担当主任)
- 望月 晃二 (保健医療技術学部総務担当主任)
- 山崎 高哉 (図書館長)
- 徳森 京子 (図書館課長)
- 古川 千佳 (図書館専門員)
- 竹村 心 (図書館専門員)
- 飯野 勝則 (図書館専門員)
- 志麻 克史 (図書館専門員)

○学部選書委員

(文学部) 小野田俊蔵、齊藤隆信、鈴木文子、坪内稔典、西川利文、松田和信、持留浩二、門田誠一、若杉邦子、渡邊忠司

(教育学部) 石原 宏、黒川嘉子、小林 隆、松瀬喜治、免田 賢、山口孝治、山田泰嗣

(社会学部) 大東貢生、千葉芳夫、林 隆紀、松永寛明

(社会福祉学部) 池本美和子、神谷栄司、里見賢治、末崎栄司、中田智恵海、丹羽國子、朴 光駿、藤松素子、芳野俊郎

(保健医療技術学部) 赤松智子、石井光昭、菅野圭子、得丸敬三、望月晃二

○浄土宗関係コレクション選定グループ

安達俊英、善 裕昭、松永知海

JOSHO
BUKKYO UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN



佛教大学

— <後記> —

本号は歴史を感じる貴重な資料、それらを活用するためにも必要な、古くて新しいこれからの図書館のひとつの方向をみるようです。

本年度、佛教大学図書館は現図書館建物竣工10周年を迎えました。利用者サービスの充実、蔵書やデータベースの拡充等に励むとともに、懸案であった漢籍、佛書のデータ入力にも本格的に取り組んでおります。近い将来、これまでのご不便を取り戻すべく、皆様のお役に立ちたいと務めております。ご期待ください。

常 照 — 佛教大学図書館報 第57号

平成20年3月1日 発行

編集・発行 佛教大学図書館

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL 075(491)2141

FAX 075(493)9042

<http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib/>